

答 申

審査請求人（以下「請求人」という。）が提起した重度心身障害者手当受給資格非該当処分に係る審査請求について、審査庁から諮問があったので、次のとおり答申する。

第 1 審査会の結論

本件審査請求は、棄却すべきである。

第 2 審査請求の趣旨

本件審査請求の趣旨は、東京都知事（以下「処分庁」という。）が請求人に対し令和 2 年 1 月 1 5 日付けで行った、重度心身障害者手当（以下「重度手当」という。）受給資格非該当処分（以下「本件処分」という。）について、その取消しを求めるものである。

第 3 請求人の主張の要旨

請求人は、おおむね以下の理由により、本件処分は違法又は不当であると主張しているものと解される。

妄想状態—調子が悪くなるとすぐに妄想世界にはいってしまう。複数の医師から服薬をすすめられているが、母がどうしても避けたい気持ちが強いため実現していない。

一般的な重度知的障害・ダウン症・ASDとの状態とは大きく異なる。精神科医療ケア、専門的な心理支援、様々な福祉的サービスが常に必要であり、家族の負担はかなり大きい。

第 4 審理員意見書の結論

本件審査請求は理由がないから、行政不服審査法45条2項により、棄却すべきである。

第5 調査審議の経過

審査会は、本件諮問について、以下のように審議した。

年 月 日	審 議 経 過
令和2年9月18日	諮問
令和2年11月5日	審議（第48回第3部会）
令和2年11月26日	審議（第49回第3部会）

第6 審査会の判断の理由

1 法令等の定め

- (1) 重度手当の支給要件については、心身に条例別表（別紙1）に定める程度の重度の障害を有することが必要であるとされている（条例2条1項）。そして、重度手当の支給を受けようとする者は、受給資格について処分庁の認定を受けることとされ（条例4条）、その認定手続は、所長が、受給資格の認定要件該当性の判定を経てその結果を処分庁に報告し（条例5条1項、規則7条1項及び2項）、処分庁は、申請及び上記報告に基づいて受給資格の有無を調査することとされている（規則8条1項及び2項）。

そうすると、請求人の障害の程度が重度手当の支給要件を満たすか否かの判断は、本件申請書及び本件判定書の添付資料である本件診断書に記載された請求人の状況を、検討して行うのが相当と解される。

- (2) 重度手当の具体的な取扱いを定めた東京都重度心身障害者手当取扱要領（昭和48年8月1日付48民障福第425号民生

局長決定（以下「本件要領」という。））によれば、重度手当の支給の対象となる重度心身障害者とは、「心身に重い障害を有し、かつ日常生活において、常時複雑な介護を必要とする者」をいい（条例 1 条参照）、「一般に重度心身障害者といわれている者（身体障害者手帳 1～2 級、愛の手帳 1～2 度相当者）とは異なり、手帳の診断とは別の観点から特に重いと診断された」者をいうとされている（本件要領第 2・3・(1)）。

そして、「『常時複雑な介護』とは、日常生活上の諸動作（食事、排泄、移動、着脱衣、その他身辺処理動作）の単純な介助ではなく、家庭内において常に精神的緊張を伴う介護」をいい、「『精神的緊張を伴う介護』とは、障害者の状態になんらかの危険が生じれば、直ちに適切な対処が必要であり、介護者が常に肉体的、精神的に緊張していることが求められる介護」をいうものとされている（本件要領第 2・3・(2)）。

また、条例別表（別紙 1）一の対象者は、「重度の知的障害であって、日常生活について常時複雑な配慮を必要とする程度の著しい精神症状を有するもの」であるところ、本件要領第 2・3・(3)によれば、これは、「ア 知的障害が非常に重く、適切な訓練指導を受けても、必要な飲食物の摂取、排泄など、必要最小限の活動について、すべて介護者にゆだねざるを得ない状態」又は「イ 重度の知的障害に加えて、適応行動面で著しい障害が重複し、日常生活において常時精神的緊張を伴う複雑な配慮を必要とする状態」のいずれかの状態にある者とされている。

- (3) さらに、「東京都重度心身障害者手当における障害要件について」（平成 11 年 3 月 18 日付 10 福障在 第 1238 号 東京都福祉局障害福祉部長通知。以下「本件通知」という。）の 1 によれば、本件要領第 2・3・(3)・イの「適応行動面で著しい

障害」とは、具体的には、（ア）問題行動（・激しい自傷、他害、器物損壊など、・著しい不潔行為（便こね、放尿等）、・異食、放火、多動を含めた危険認知不十分な行動、・激しい興奮（パニック、奇声、飛び跳ね、飛び出し等）、・日常生活に支障をきたす程のこだわり、・睡眠障害、拒食など生活習慣の著しい偏り）、（イ）精神症状（・躁鬱の波が激しい、・分裂病様の奇妙でまとまりのない行動、自発性の低下、・強迫行動のため日常生活に支障をきたす）、（ウ）難治性のてんかんをいうとされている。

(4) なお、本件要領及び本件通知は、条例の解釈、運用の指針を示したものである。

2 これを本件について、以下検討する。

(1) 本件申請書において、請求人の障害の状況は、条例別表一に該当する旨記載されているので、請求人の障害の程度が、同別表一に該当するものか否かについて、以下検討する。

本件診断書によれば、請求人は、知的障害については「重度の知的障害を有すると認められる。」（別紙2・1）との診断が、精神症状については「日常生活について常時複雑な配慮を要する程度の著しい精神症状を有するとは認められない。」（別紙2・2）との診断がなされている。

そこで、まず、請求人の知的障害についてみると、請求人は愛の手帳（2度）を所持しており、本件診断書にも、重度知的障害、ダウン症候群と記載されていることから、請求人は、「知的障害が非常に重い」（本件要領第2・3・(3)・ア）状態にあると認められる。

しかし、知的障害及び精神症状についての所見欄（別紙2・3）には、「母が仕事をしていて日中は本人ひとりで留守番しており」、「留守番中の問題行動なし。」と記載されているこ

とからすれば、請求人が、「必要な飲食物の摂取、排泄など、必要最小限の活動について、すべて介護者にゆだねざるを得ない状態」にあると認めることはできない（本件要領第2・3・(3)・ア）。

また、上記所見欄（別紙2・3）には、「他害、自傷、破損、興奮はなく、拒否はじっとしてその場から動かないことで表現する。」、「自宅で過ごすことが大好きで、様々な創作活動を楽しんでおり、頑固さや拒否はあるものの、自宅にいる限りは落ち着いて過ごしている様子。」、「てんかんなし。」と記載されていることからすると、請求人が、「適応行動面で著しい障害が重複し、日常生活において常時精神的緊張を伴う複雑な配慮を必要とする状態」に至っているとまでは認められない（本件要領第2・3・(3)・イ）。

以上のことからすると、請求人は、本件要領第2・3・(3)のア又はイのいずれかの状態にある者とはいえず、常時複雑な介護（介護者が常に、肉体的、精神的に緊張していることが求められる介護。本件要領第2・3・(2)）を必要とするような程度に至っているとまで認めることは困難であるというほかない。

したがって、請求人は、重度の知的障害を有するものの、「日常生活について常時複雑な配慮を必要とする程度の著しい精神症状を有する」（条例別表一）とは認められないとする〇〇医師の診断（別紙2）に、不合理な点は認められない。

(2) よって、請求人は、条例別表に定める重度手当の受給資格を有しないものと判断するのが相当であり、これと同旨の結論を採る本件処分に違法又は不当な点は認められない。

3 請求人は、上記第3のとおり主張する。

しかしながら、処分庁による重度手当の受給資格の有無に係る判定は、本件判定書に反映された本件診断書の記載内容に基づい

てなされるべきものであり、重度手当の受給資格を非該当と判断するのが相当であることは、上記2のとおりであるから、請求人の主張は理由がないというほかない。

- 4 請求人の主張以外の違法性又は不当性についての検討
その他、本件処分に違法又は不当な点は認められない。

以上のとおり、審査会として、審理員が行った審理手続の適正性や法令解釈の妥当性を審議した結果、審理手続、法令解釈のいずれも適正に行われているものと判断する。

よって、「第1 審査会の結論」のとおり判断する。

(答申を行った委員の氏名)

外山秀行、渡井理佳子、羽根一成

別紙1及び別紙2(略)